

自閉症スペクトラム障害児を対象とした集団における 対人関係支援 —— 対人関係ゲームを通じた他者の意図や心的状態の理解の深まり ——

横田 晋務^{1,2}・田中 真理¹

¹ 東北大学大学院教育学研究科

² 日本学術振興会特別研究員

要約

本稿では、自閉症スペクトラム障害児における他者の意図や心的状態の理解の困難さへの支援について、1 事例の集団遊戯療法における変容から考察をおこなった。自閉症スペクトラム障害児における他者の意図や心的状態の理解の困難さは、理解の手がかりとなる要素へと注意を向けることの困難さ、様々な雑多な情報が存在する社会的文脈の中でその能力を自発的に使用することの困難さがその背景にあると考えられる。本稿で取り上げた事例の変容から、介入の視点として、注意の方向付けを行うこと、スキルの獲得ではなく、スキルの使用に重点を置いた支援が自閉症スペクトラム障害児における対人関係支援を行うことの有効性が示唆された。

1. 自閉症スペクトラム障害児における他者の意図、心的状態を理解することの困難さとそれに対する支援について

自閉症スペクトラム障害 (ASD) とは、社会的相互交渉、コミュニケーション、想像力という 3 つ組の障害で特徴づけられる (Wing & Gould, 1979)。また、ASD の 1 次的障害としてしばしば論じられるのは、心の理論の障害 (Baron-Cohen, 1989, 1992; Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985; Happé, 1994; Leslie & Frith, 1988) である。心の理論とは、他者の行動を心的状態 (信念や願望など) に帰属する能力のことである。人は相手の心的状態を推測し、それを用いて相手の行動を説明・解釈している (Premack & Woodruff, 1978)。これらの困難さにより対人関係を構築すること、円滑に維持することへの困難さへ繋がると考えられる。また、ASD 者の中には、机上課題による心の理論課題を通過し、心の理論を獲得していると考えられる者でも、日常の社会的文脈の中で、その能力を活用することができず、依然として、対人関係に困難さを有していることが指摘されている (Happé, 1994)。ASD 者のこのような状態像を考えると、心の理論の獲得の困難さと日常生活の中でその能力を自発的に利用することの困難さ (Klin, Jones, Schultz, & Volkmar, 2003; Klin, Jones, Schultz, Volkmar, & Cohen, 2002; Senju et al., 2010) が存在することが考えられる。

このような状態像を示す ASD 児・者に対し、心の理論獲得の支援を行った先行研

究は多数存在する。これらの先行研究は、以下の3種類に大別することができる。すなわち、(1)心の理論の有無を測定するために用いられる心の理論課題のシナリオを変化させた課題を行い、心の理論を教えようとするもの(Hadwin, Baron-Ohen, Howlin, & Hill, 1996; J. Swettenham, 1996)、(2)他者の心的状態を写真など可視化できるものに置き換え、心の理論の概念を教えようとするもの(JG Swettenham, 1996)、(3)日常生活で必要とされるソーシャルスキルを教えることで他者の意図や心的状態を理解する能力の向上を図り、心の理論課題の成績からその効果を検証しようとするもの(Chin & Bernard-Opitz, 2000; Feng, Lo, Tsai, & Cartledge, 2008; Ozonoff & Miller, 1995; Reinecke, Newman, Kurtz, Ryan, & Hemmes, 1997)である。このように、様々なアプローチを用いて ASD 児・者における他者の意図や心的状態の理解を向上させようとする試みがなされているが、その効果に関しては懐疑的である。大きな問題として、介入を行ったシナリオと類似した心の理論課題を通過することは可能となるが、別のシナリオによる心の理論課題を通過することができないことが挙げられるためである(Ozonoff & Miller, 1995)。つまり、介入を行った ASD 児・者は心の理論を獲得したのではなく、心の理論課題の解答を学習したために課題に通過することができたと考えることができ、シナリオから外れた状況においては、他者の意図や心的状態の理解に依然として困難さを抱えていると考えられる。したがって、ASD 児・者における他者の意図や心的状態の理解を促すためには、彼らがなぜ困難さを有するのかという理論的背景を考え、それに応じた支援モデルを構築することが重要であると考えられる。

ASD 児・者における困難さを説明しうる理論として、本稿では、突出風景理論(Ramachandran & Oberman, 2007)および, enactive mind アプローチ(以下 EMA; Klin et al., 2003)を取り上げる。突出風景理論は主に、他者への志向性の希薄さを説明する理論である。この理論で、人間が環境中から受け取る知覚的情報は、脳の感覚野に入力された後、扁桃体、大脳辺縁系を経て自律神経系へと送られる。この過程の中で、扁桃体は個人のそれまでの社会的経験や記憶を基に、環境中から感情的に重要な刺激を詳述するマップ(突出風景)を作るとされている。しかし、ASD 者の場合、扁桃体と大脳辺縁系の連絡に異常があるため、この突出風景は定型発達者とのそれとは異なりゆがめられてしまっていると考えられる。例えば、定型発達者では、他者と話す場合には、相手の視線、表情、行動などが、感情的に重要な刺激であると判断されるため、突出風景は、自ずとそれらを突出させて描き出すことになる。これにより他者への志向性が喚起され、他者の心的状態や人格特性といった他者理解に必要な情報が重要度をもって認識される。しかし、ASD 者の場合はこのゆがみにより、相手の表情や視線ではなく、別の要素(例えば服装や髪型など)が強調された突出風景が描き出され、それらの要素へと注意が喚起されるため、他者への志向性が希薄になり他

者の意図や心的状態の理解へと繋がりにくいと考えられる。この一例として、年齢や性別、表情、被っている帽子の種類など複数のバリエーションのある他者の顔写真を分類する際に定型発達児は、表情を基準に分類するが、ASD 児は、被っている帽子の種類に注目し、分類する傾向にあることが明らかにされている（Weeks & Hobson, 1987）。

また、心の理論など他者の意図や心的状態の理解に必要とされる能力を自発的に使用する能力の困難さに関して、EMA では、社会的文脈における状況の複雑性を含んだモデルにより、心の理論課題などの他者の意図や心的状態を推測する上で必要となる手がかりが明示的に示されている状況ではなく、そういった手がかりとなる情報がそれ以外の雑多な情報の中に埋没しており、さらに、刻々と状況自体が変化するような文脈を前提としている。EMA は、認知神経科学を基盤とした雑多な状況の中で他者の行動から得た情報を統合するための認知的枠組みであり、能力の有無ではなく、能動的な使用の仕方に焦点を当てている。この機能によって、象徴機能を形成することが可能となり、社会的順応の 1 つのツールとなるとされる（Klin et al., 2003）。このモデルの実証的な根拠として、Klin et al. (2003) は社会的な状況を描いた動画を視聴している際の視線の動きから、ASD 児・者は自発的に社会的なキュー（指差し）を利用して他者の意図を読み取ることをしない傾向を見出しており、このことから ASD 児・者は EMA において特異性を有していると推察している。

本稿にて取り上げる事例は、「関わってくれる場を持ちたい、できることを見つけて就職につなげたい」という可能性の発見と、対人的なスキルを磨くことを主訴として、筆者が 5 年にわたり関わった 1 名の ASD 児 A である。対人支援ゲーム場面における A は、“ゲームのルールを説明している際に、スタッフの持っていた紙に描かれたゲームキャラクターを見て、突然立ち上がり、紙を奪って自分 1 人だけで見ようとする”といったことや、“注意を向けるべき対象（メンバーやスタッフ）に＜A 君、見て＞と方向付けた際には、志向することができるが、そのような促しがない際にはぼんやりと窓の外を眺めていたり、プレイルーム内をウロウロしていたりする”などの状態像が見られており、A においても突出風景理論や EMA において指摘されている他者への志向性の困難さや、自発的にスキルを使用することの困難さが数多く見受けられる。

これらの理論を統合して ASD 児・者における他者の意図や心的状態の理解の困難さへの支援の視点として、突出風景理論により、定型発達児・者とは異なる要素に注意を焦点づけやすい傾向に対しては、他者の意図や心的状態の理解に必要とされる要素へより注意を方向付けていくことが考えられる。また、保持している能力を社会的文脈の中で自発的に使用することの困難さに対しては、机上課題のような他者の意図や心的状態の理解に必要とされる手がかりが明示的に与えられる様な状況ではなく、環境的要素を必要最小限に統制することにより、より日常的な文脈に近い状況を用い

る。これにより、自発的な他者の意図や心的状態の理解を促すことができると考えられる（Fig. 1）。以上を踏まえ、本稿では、他者の意図や心的状態の理解の困難さを示した ASD 児 1 事例の集団遊戯療法における他者の意図や心的状態の理解の変容から、支援の方向付けに関して考察を行うことを目的とする。

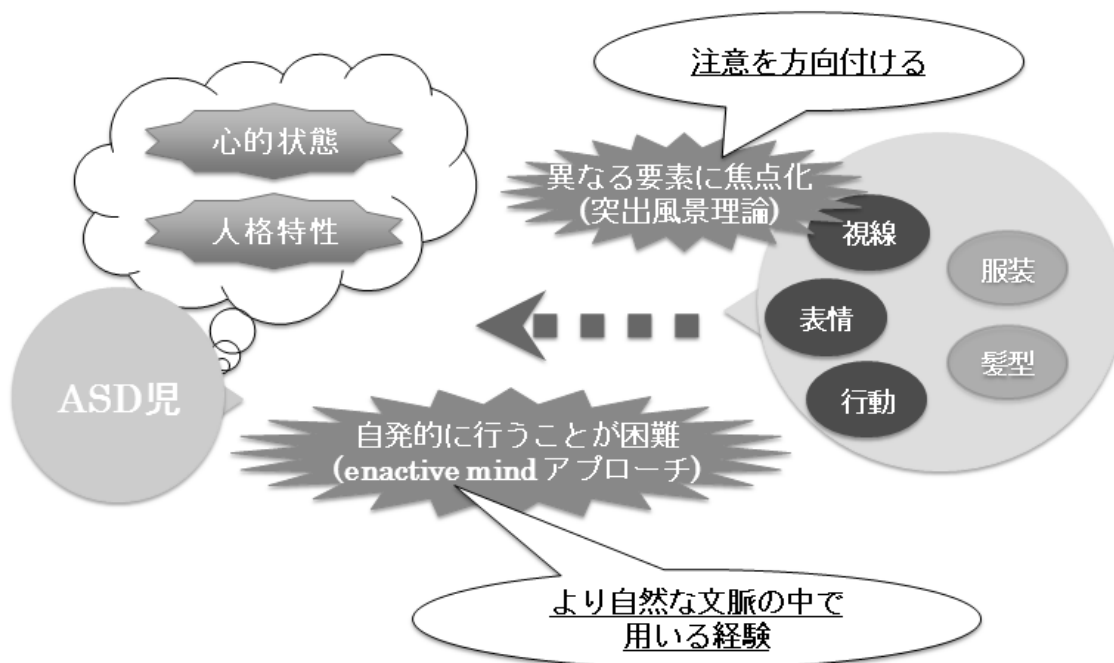


Fig. 1 突出風景理論，EMA に基づいた支援の視点

2. 集団遊戯療法による対人支援により、他者の意図や心的状態の理解の変容を示した事例 A

A は 11 歳より 5 年間集団遊戯療法のグループへ参加している。参加当初の状態像としては、他者への志向性が希薄であるために、ルール説明時に自分の興味の対象へと注意が向いてしまい、ルールを聞いていないため、何をすべきか分からないままゲームへと臨むことや、ゲームに参加せず部屋をウロウロするといった様子であった。また、他者の心的状況の理解に関しては、心の理論課題は 13 歳時に 1 次の誤信念課題を通過しているが、13 歳以降においても、メンバーの B と C が喧嘩をしている場面にもかかわらず B に対して唐突に A「B 君って何年生？」と発言する様子が見られ、他者の心的状態の理解を日常的な文脈で使用するものの困難さを抱えている。以下では、他者の意図や心的状態を推測することがゲームを進める上で必要となる対人支援ゲームにおける A の言動を取り上げ、14 歳から 16 歳の約 3 年間の A の他者の意図や心的状態理解の変容と支援としての介入についてまとめる。

“名役者は誰だゲーム”は、前に出てきた何人かの中でターゲットとなる物や食べ物（ボールや辛い食べ物）を持っている人／食べた人をその人の表情や発言を手がかりに当てるゲームである。したがって、ターゲットとなる人を当てる側は他者の意図や心的状態（本当は辛い当てられないように「おいしい」と言っているかもしれない）を推測する必要がある、一方で演技をする側はどのように行動すれば当てられないかという当てる側の意図を推測する必要がある。このように他者の意図や心的状態を理解することそのものを支援するのではなく、そのスキルを使用することがゲームを楽しむ、ゲームに勝つ上で必要となるゲームである。Aは、初めのうち前に出て演技をする人物に注意を向けることが困難であり、近くにいた他のメンバーやゲームとは直接関係ないメンバーの言動に注意を向けることが多く、結果としてゲームを遂行することが困難であった。

(i) メンバーのBとCのうちどちらが辛い物を食べたかを当てる時に、Aは隣にいたDにAが好きなゲームキャラクターの話を始め、B、Cに注意が向かない。スタッフはAに対して＜見て＞と言いながらBの方を指さす。するとAはにこにこしながらBの方を見る。その後、＜どっちが辛い物食べたと思う？＞A「B」＜理由は？＞A「〇〇（ゲームキャラクターの名前）」＜なんでB君は嘘つきだと思う？＞A「辛い物食べたから」

（＜＞内はスタッフの発言）

このようにAは、スタッフからの促しを受けて、対象へと注意を向けることはできているが、他者のどの要素（表情、発言など）に注意を向ければいいのかということは自発的に理解することができていない状態であった。このような様相を示したAに対し、スタッフは＜さっきどんな顔しながら食べてた？＞、＜目がぱちぱちしてたから辛い物食べたかもしれないね＞など他者意図理解をする際に判断材料となる要素にAの注意を焦点付けるような関わりを行った。その後、Aは他者の表情や発言へ自発的に注目するようになり、それを手がかりに他者の心的状態を推測することがみられるようになった。

(ii) Cが辛い物を食べ、辛いことを隠すように無表情を装っていると、A「C君辛そうな顔してる」と自発的に表情に注目した発言を行う。その後、CがOKのポーズをするとAは真っ先に気づき、A「あっ！うまそうな顔してる」

このように、自発的に他者の心的状態を推測する様子がみられ始めたが、この時点でAは、「不自然な顔をしている→辛い物を食べたのだろう」「OKのポーズをした→辛い物を食べていないのだろう」という一元的な推測を行っており、他者がどのような意図の下でそういった行動をしているのか（騙そうと思って本当のことを言っていないかもしれない）という理解には至っていない。そこで、スタッフは、＜本当は辛い物を食べているけれど、嘘ついて笑っているのかもしれないなあ＞と表情や行動と意図性の関連性を積極的に提示することを念頭に関わりを続けた。するとAはスタッフ

から提示された手がかりを利用し、どうして他者がその行動を行っているのかという意図に関する推測を行うようになった。

(iii) Cが箱からボールを取り出す際に、実際にはボールを取ることはせず、笑いながらボールを取り出すふりをする。＜今C君笑ったね！＞するとそれを見ていたAは「C君が笑ったから（嘘をついて）ボールを持っているはず」と推測を行った。その後、Aはその時の他者の表情や発言だけでなく、同じグループに参加しているメンバーとの関わりから、過去のメンバーの言動や自分の行動と他者の心的状態との関連などを手がかりに、他者の人格特性への理解を自発的に行う様子が見受けられるようになった。

(iv) 他のメンバーの特性に当てはまるカードをカルタのように複数のカードの中から選ぶゲームで、AはEの特性として“笑ってはいけないときに笑う”を選ぶ。＜A君は何でE君を笑ってはいけないときに笑う人だと思うの？＞A「E君は普段あんまり笑わないから」。

(v) Aが自分の好きなゲームキャラクターの話をし続けたため、Dが「うるさい！」と邪険にしたことを受けてA「D君は怒りんぼ？僕がしつこく質問したらD君が怒ってしまった」

(vi) ババ抜きをした際に、スタッフの1人がにやにやしながら＜私はババを持っていますでしょうか？＞とAに聞くと、A「どうせにやけてるから持ってると思います」。このようなAの他者の人格特性の理解は、Aがグループに参加する中で、自発的に他者へ志向を向け、Aなりの理解を示した結果であると考えられる。また、Aによる「Eは“普段”あんまり笑わない」という理解は、このグループはメンバーが固定されているクローズドグループであり、同一の人物と長期間関わることで得られた気づきであると考えられる。さらに、ババ抜きの場面は、前述した“名役者は誰だゲーム”と同様に他者の表情や言動を手がかりに他者の意図を推測する場面であり、Aは自発的にスタッフの表情に志向し、推測を行うことができている場面である。

3. ASD児・者において他者の意図や心的状態の理解を促すための支援

約3年間にわたる対人関係ゲームを用いた他者の意図や心的状態の理解に対する支援により、Aは、スタッフから促しを受けて受動的に他者へ志向するが対象のどの要素に焦点を当てればよいのかがはっきりしない段階(i)、自発的に手がかりとなり得る要素に志向するが一元的な他者の心的状態の推測を行う段階(ii)、より他者の意図に焦点を当てて他者の心的状態の推測をする段階(iii)を経て、自分自身と他者との関わりの中から他者の意図や心的状態だけでなく、他者の特性への理解を示す(iv～vi)という深まりをみせた。

このようなAにおける他者の意図、心的状態を理解する能力の変容過程において、

スタッフはAの他者の意図や心的状態の理解の様相に応じて、Aの注意を方向付ける、他者の表情や言動を手がかりに他者の意図や心的状態を推測するモデルとなる声かけをするといった支援を行った。また、集団遊戯療法の場合は、複数のメンバーが存在しており、メンバー間の相互作用も多く生起することから、EMAで想定されるような刻々と状況が変化する文脈にあると考えられる（Klin et al., 2003）。そのような中で介入を行うことにより、雑多な状況の中から他者の意図や心的状態の推測を行う上で重要となる情報を取捨選択することが促されたと考えられる。さらに、対人関係支援ゲームで用いられたゲームはいずれも他者の意図や心的状態の推測の仕方を教えるものではなく、そのスキルを使用することがゲームを楽しむ上で必要となる構造であった。このような、あるスキルの獲得ではなく、自発的な使用に焦点化した対人支援を行うことでASD児・者が自発的に能力を使用することに繋がると考えられる。

引用文献

- American Psychiatric Association (2003) DSM - IV-TR 医学書院.
- Baron-Cohen, S. (1989). The autistic child's theory of mind: A case of specific developmental delay. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 30(2), 285-297.
- Baron-Cohen, S. (1992). Out of sight or out of mind? Another look at deception in autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 33(7), 1141-1155.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., & Frith, U. (1985). Does the autistic child have a "theory of mind"? *Cognition*, 21(1), 37-46.
- Chin, H. Y., & Bernard-Opitz, V. (2000). Teaching conversational skills to children with autism: Effect on the development of a theory of mind. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 30(6), 569-583.
- Feng, H., Lo, Y., Tsai, S., & Cartledge, G. (2008). The effects of theory-of-mind and social skill training on the social competence of a sixth-grade student with autism. *Journal of Positive Behavior Interventions*, 10(4), 228.
- Hadwin, J., Baron-Cohen, S., Howlin, P., & Hill, K. (1996). Can we teach children with autism to understand emotions, belief, or pretence? *Development and Psychopathology*, 8, 345-366.
- Happé, F. G. E. (1994). An advanced test of theory of mind: Understanding of story characters' thoughts and feelings by able autistic, mentally handicapped, and normal children and adults. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 24(2), 129-154.
- Klin, A., Jones, W., Schultz, R., & Volkmar, F. (2003). The enactive mind, or from actions to cognition: Lessons from autism. *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Sciences*, 358(1430), 345-360.
- Klin, A., Jones, W., Schultz, R., Volkmar, F., & Cohen, D. (2002). Visual fixation

- patterns during viewing of naturalistic social situations as predictors of social competence in individuals with autism. *Archives of general psychiatry*, 59(9), 809.
- Leslie, A. M., & Frith, U. (1988). Autistic children's understanding of seeing, knowing and believing. *British Journal of Developmental Psychology*, 6(4), 315-324.
- Ozonoff, S., & Miller, J. N. (1995). Teaching theory of mind: A new approach to social skills training for individuals with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 25(4), 415-433.
- Ramachandran, V. S., & Oberman, L. M. (2007). Broken mirrors: A theory of autism. *Scientific American*, 17(2), 20-29.
- Reinecke, D. R., Newman, B., Kurtz, A. L., Ryan, C. S., & Hemmes, N. S. (1997). Teaching deception skills in a game-play context to three adolescents with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 27(2), 127-137.
- Senju, A., Southgate, V., Miura, Y., Matsui, T., Hasegawa, T., Tojo, Y., . . . Csibra, G. (2010). Absence of spontaneous action anticipation by false belief attribution in children with autism spectrum disorder. *Development and Psychopathology*, 22(02), 353.
- Swettenham, J. (1996). Can children with autism be taught to understand false belief using computers? *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 37(2), 157-165.
- Swettenham, J. (1996). What's inside someone's head? Conceiving of the mind as a camera helps children with autism acquire an alternative to a theory of mind. *Cognitive Neuropsychiatry*, 1(1), 73-88.
- Weeks, S. J., & Hobson, R. P. (1987). The salience of facial expression for autistic children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 28(1), 137-152.
- Wing, L., & Gould, J. (1979). Severe impairments of social interaction and associated abnormalities in children: Epidemiology and classification. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 9(1), 11-29.

謝辞

本稿を執筆するにあたり、協力いただきましたA君をはじめグループメンバーに感謝申し上げます。

本稿は、教育ネットワークセンターコンサルテーション事業支援および科学研究費補助金（基盤研究B 23330270 代表：田中真理）の助成を受けた。